



## 年間第 4 主日 (マルコ 1:21-28)

イエス・キリストの名に信頼して語る

年間第 4 主日、「汚れた霊に取りつかれた男をいやす」物語が福音朗読に選ばれました。ことばが命令となり、命令が出来事となります。イエスはこの出来事で何を示そうとしておられるのでしょうか。

いわゆる「悪魔払い」のような儀式は、どんな時代、どんな地方でも知られていたと思います。ただそれらは儀式としてのものであって、イエスのわざは怪しい儀式によらず、「黙れ。この人から出て行け」と叱るだけでした。

私はこれまで、単に「汚れた霊が出て行った」という外面的なこと、表面的なことしか見ていませんでしたが、もっと考えると、いやされたこの男性は「解放された」のではないか。そのことに気づきました。

最近「生活の質を上げる取り組み」がいろいろな場面で注目されるようになりました。例えば単に長く生きるだけではなく、「より人間らしく生きる」そのための取り組みが重視されます。医療でも痛みを取り除きながら治療するとか、外見が損なわれないような手術とかです。どのように生きるか。どのように人間らしい生活を取り戻すか。この点に社会も注目し始めました。

痛みと付き合いながら生きている人がいます。私は痛みと縁がないので、ほとんど気持ちが分かりません。けれども、痛みから逃げられない人の中には、「いっそのこと腕を切り落としてほしい」とか「足を切り落としてほしい」と考えるまで追い詰められる人もいます。

その人に、痛みのない生活が与えられたら、きっと「救われた」「解放された」と思うことでしょう。そして、痛みを取り除いてくれた人を「私を解放してくれた人」「救ってくれた人」と考えるでしょう。

物語にも、イエスによって解放された人が登場します。このように神の国の支配がすべての人に及ぶ時、人は苦しみ悩みから解放されるのです。この人は表面的な自由ではなくて、生きていることのすべてを神に感謝できる、そんな心の底からの解放を、イエスに与えてもらったのです。きっとこの人は、イエスを「救い主」と理解したことでしょう。

イエスは汚れた霊を「叱る」だけで、汚れた霊の支配から解放しました。かつて私は、似たような場面を父から聞いたことがあります。家庭訪問を二人一組とする宗教団体の人が実家の父を訪ねてきたそうです。いよいよ二人が、父を説き伏せようとしたその時、父はこの二人を「うせろ」と一喝しました。二人は尻尾を巻いて逃げていったそうです。

この話、当時は面白い話としてだけ聞いたのですが、今考えると二人一組で回るこの人たちが父の言葉によって新興宗教の束縛から解放され、まことの救いに導かれるきっかけになればといいなと思いました。

私たち人間の言葉は拙いものです。しかし、イエス・キリストの名によって語る言葉は、汚れた霊を追い返す可能性があります。イエス・キリストの名によって「黙れ」と言う。その機会が与えられたら、ためらわずに語りたいたいと思います。